春陽選書

土

長塚節

春陽堂

土

長塚節 著

春陽堂版

昭和二十一年八月十五日　印刷
昭和二十一年八月二十日　發行
（發行部數一五、〇〇〇部）

著作權所有

小說「土」
定價　金拾四圓

著作者　長塚節

發行者　東京都日本橋區通三丁目八番地
和田利彦

印刷者　東京都日本橋區通三丁目八番地
東陽印刷株式會社
古川篤夫

發行所　東京都日本橋通三丁目八番地
株式會社　春陽堂
（會員番號A一一九〇三三）電話日本橋（四八四八・四八四九）五一・四三七三
振替東京一六一七番

配給元　東京都神田區淡路町　日本出版配給株式會社

「土」に就て

夏目漱石

「土」が「東京朝日」に連載されたのは一昨年の事である。さうして其責任者は余であつた。所が不幸にも余は「土」の完結を見ないうちに病氣に罹つて、新聞を手にする自由を失つたぎり、又「土」の作者を思ひ出す機會を有たなかつた。

當初五六十回の豫定であつた「土」は、同時に意外の長篇として發達してゐた。途中で話の緒口を忘れた余は、再びそれを取り上げて、矢張り頭切から改めて讀み出す勇氣を鼓舞しにくかつたので、つい夫限に打ち遺つたやうなものゝ、腹のなかでは私かに作者の根氣と精力に驚ろいてゐた。「土」は何でも百五六十回に至つて漸く結末に達したのである。

冷淡な世間と多忙な余は其後久しく「土」の事を忘れてゐた。所がある時此間亡くなつた池邊君に會つて偶然話頭が小説に及んだ折、池邊君は何故「土」は出版にならないのだらうと云つて、大分長塚君の作を褒めてゐた。池邊君は其當時「朝日」の主筆だつたので「土」は始から社舞迄眼を通したのである。其上池邊君は自分で文學を知らないと云ひながら、其實鋭敏な批評眼をもつて「土」を根氣よく讀み通したのである。余は出版界の不景氣のために「土」の單行本が出る時機がまだ來ないのだらうと答

へて置いた。其時心のうちでは、隨分「土」に比べると詰らないものを公けにされる今日だから、出來るなら何時か書物に纏めて置いたら作者の爲に好からうと思つたが、不深切な余は其日が過ぎると、又「土」の事を丸で忘れて仕舞つた。

すると此春になつて長塚君が突然尋ねて來て、漸く本屋が「土」を引受ける事になつたから、序を書いて呉れまいかといふ依頼である。余は其時自分の小說を毎日一回づゝ書いてゐたので、「土」を讀み返す暇がなかつた。已を得ず自分の仕事が濟む迄待つてくれと答へた。すると長塚君は池邊君の序も欲しいから序でに紹介して貰ひたいと云ふので、余はすぐ承知した。余の名刺を持つて「土」の作者が池邊君の玄關に立つたのは、池邊君の母堂が死んで丁度三十五日に相當する日とかで、長塚君はたゞ立ちながら用事丈を頼んで歸つたさうであるが、それから三日して肝心の池邊君も突然亡くなつて仕舞つたから、同君の序はたうとう手に入らなかつたのである。

余は「彼岸過迄」を片付けるや否や前約を踏んで「土」の校正刷を讀み出した。思つたよりも長篇なので、前後半日と中一日を丸潰しにして漸く筆を卒へて考へて見ると、中々骨の折れた作物である。余は元來が安價な人間であるから、大抵の人のものを見ると、すぐ感心したがる癖があるが、此「土」に於ても全くさうであつた。先づ何よりも先に、是は到底余に書けるものでないと思つた。次に今の文壇で長塚君を除いたら誰が書けるだらうと物色して見た。すると矢張誰にも書けさうにないといふ結論に達した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

尤も、誰にも書けないと云ふのは、文を遣る技倆の點や、人間を活躍させる天賦の力を指すのではない。もし夫丈の意味で誰も長塚君に及ばないといふなら、一方では他の作家を侮辱した言葉にもなり、又一方では長塚君を擡ぎ過ぎる策略とも取れて、何方にしても作者の迷惑になる計である。余の誰も及ばないといふのは、作物中に書いてある事件なり天然なりが、まだ長塚君以外の人の研究に上つてゐないといふ意味なのである。

「土」の中に出て來る人物は、最も貧しい百姓である。教育もなければ品格もなければ、たゞ土の上に生み付けられて、土と共に生長した帆同樣に憐れな百姓の生活である。先祖以來茨城の結城郡に居を移した地方の豪族として、多數の小作人を使用する長塚君は、彼等の獸類に近き、恐るべき困態を極めた生活狀態を、一から十迄誠實に此「土」の中に收め盡したのである。彼等の下卑で、淺薄で、迷信が強くて、無邪氣で、狡猾で、無欲で、强欲で、殆んど余等（今の文壇の作家を悉く含む）の想像にさへ上りがたい所を、あり〳〵と眼に映るやうに描寫したのが「土」である。さうした「土」は長塚君以外に何人も手を著けられ得ない、苦しい百姓生活の、最も獸類に接近した部分を、精細に直叙したものであるから、誰も及ばないと云ふのである。

人事を離れた天然に就いても、前同樣の批評を如何な讀者も容易に肯はなければ滑まぬ程、作者は鬼怒川沿岸の景色や、空や、春や、秋や、雪や、風を綿密に研究してゐる。畠のもの、畔に立つ榛の木、蛙の聲、鳥の音、苟くも彼の鄕土に存在する自然なら、一點一畫の微に至る迄悉く其地方の特色を具へ

て叙述の筆に上つてゐる。だから何處に何う出て來ても必ず獨特（ユニーク）である。其獨特な點を、普通の作家の手に成つた自然の描寫の平凡なのに比べて、余は誰も及ばないといふのである。余は彼の獨特（ユニーク）なのに感服しながら、そのあまりに精細過ぎて、話の筋を往々にして殺して仕舞ふ失敗を歎じた位、彼は精緻な自然の觀察者である。

作としての「土」は寧ろ苦しい讀みものである。決して面白いから讀めとは云ひ惡い。第一に作中の人物の使ふ言葉が余等には餘り緣が遠い方言から成り立つてゐる。第二に結構が大きい割に、年代が前後數年にわたる割に、周圍に平たく發達したがる話が、筋をくつきりと描いて深くなりつゝ前へ進んで行かない。だから全體として讀者に畑違（アクセーション）の興味を與へない。だから事件が錯綜紛糾して縺れながら讀者をぐい〳〵引込んで行くよりも、其地方の年中行事を怠りなく丹念に平叙して行くうちに作者の持らへた人物が斷續的に活躍すると云つた方が適當になつて來る。其處に鄙か人を魅する牽引力を失ふ恐が潜んであるといふ意味でも讀みづらい。然し是等は單に皮相の意味に於て讀みづらいので、余の所謂讀みづらいといふ本意は、篇中の人物の心なり行なりが、たゞ壓迫と不安と苦痛を讀者に與へる丈で、毫も神の作つてくれた幸福な人間であるといふ刺戟と安慰を與へ得ないからである。悲劇は惡ろしいに違ない。けれども普通の悲劇のうちには悲しい以外に何かの慰ひがあるので、讀者は涙の犧牲を喜ぶのである。が「土」に至つては涙さへ出されない苦しさである。雨の降らない代りに生涯照りつこない天氣と同じ苦痛である。たゞ土の下へ心が沈む丈で、人情から云つても道義心から云つても、殆んど此壓

迫の賠償として何物も與へられてゐない。たゞ土を掘り下げて暗い中へ落ちて行く丈である。

「土」を讀むものは、屹度自分も泥の中を引き摺られるやうな氣がするだらう。余もさう云ふ感じがした。或者は何故長塚君はこんな讀みづらいものを書いたのだと疑ふかも知れない。そんな人に對して余はたゞ一言、斯樣な生活をして居る人間が、我々と同時代に、しかも帝都を去る程遠からぬ所に住んで居るといふ悲慘な事實を、ひしと一度は胸の底に抱き締めて見たら、公等の足から先の人生觀の上に、又公等の日常の行動の上に、何かの參考として利益を與へはしまいかと聞きたい。余はとくに歡樂に憧憬する若い男や若い女が、讀み苦しいのを我慢して、此「土」を讀む勇氣を鼓舞する事を希望するのである。余の娘が年頃になつて、音樂會がどうだの、帝國座がどうだのと云ひ騷る時分になつたら、余は是非此「土」を讀ましたいと思つて居る。娘は屹度厭だといふに違ない。より多くの興味を感ずる戀愛小説と取り換へて與れといふに違ない。けれども余は其時娘に向つて、面白いから讀めといふのではない。苦しいから讀めといふのだと告げたいと思つて居る。參考の爲だから、世間を知る爲だから、知つて己れの人格の上に暗い恐ろしい影を反射させる爲だから我慢して讀めと忠告したいと思つて居る。何も考へずに暖かく生長した若い女（男でも同じである）の起す苦提心や宗教心は、皆此暗い影の奥から射して來るのだと余は固く信じて居るからである。

長塚君の書き方は何處迄も沈着である。其人物は皆有の儘である。語の筋は全く内緊である。余が「土」を「朝日」に載せ始めた時、北の方のSといふ人がわざ〳〵書を余の許に寄せて、長塚君が旅行

して彼と面會した折の議論を報じた事がある。長塚君は余の「朝日」に書いた「滿韓ところ〴〵」といふものをSの所で一回讀んで漱石といふ男は人を馬鹿にして居るといつて大いに憤慨したさうである。漱石に限らず一體「朝日」新聞の記者の書き振りは皆人を馬鹿にして居ると云つて罵つたさうである。成程眞面目に老成した、殆んど嚴肅といふ文字を以て形容して然るべき「土」を書いた、長塚君としては尤もの事である。「滿韓ところ〴〵」抔が君の氣色を害したのは左もあるべきだと思ふ。然し君から輕佻の疑を受けた余にも眞面目な「土」を讀む眼はあるのである。だから此序を書くのである。長塚君はたま〳〵「滿韓ところ〴〵」の一回を見て余の浮薄を憤つたのだらうが、同じ余の手になつた外のものに偶然眼を觸れたら、或は反對の感を起すかも知れない。もし余が徹頭徹尾「滿韓ところ〴〵」のうちで、長塚君の氣に入らない一回を以て終始するならば、到底長塚君の「土」の爲に是程言辭を費やす事は出來ない理窟だからである。

長塚君は不幸にして喉頭結核にかゝつて、此間迄東京で入院生活をして居たが、今は養生旁旅行の途にある。先達てかねて紹介して置いた福岡大學の久保博士からの來書に、長塚君が診察を依頼に見えたとあるから、今頃は九州に居るだらう。余は出版の時機に後れないで、病中の君の爲に、「土」に就いて是丈の事を云ひ得たのを喜ぶのである。余がかつて「土」を「朝日」に載せ出した時、ある文士が、我々は「土」などを讀む義務はないと云つたと、わざ〳〵余に報知して來たものがあつた。此時余は此文士は何の爲に罪もない「土」の作家を侮辱するのだらうと思つて苦々しい不愉快を感じた。理窟から

云つて、讀まねばならない義務のある小說といふものは、其小說の校正者か內務省の檢閱官以外にさうあらう筈がない。わざ〳〵斷らんでも厭なら厭で、默つて讀まずに居れば夫迄である。もし又名の知れない人の書いたものだから讀む義務はないと云ふなら、其人は只名前丈で小說を讀む、內容などには頓着しない、門外漢と一般である。文士ならば同業の人に對して、たとひ無名氏にせよ、今少しの同情と尊敬があつて然るべきだと思ふ。余は「土」の作者が病氣だから、此場合には猶更さう云ひたいのである。

（明治四十五年五月）

土

長塚節

一

烈しい西風が目に見えぬ大きな塊をごうつと打ちつけては又ごうつと打ちつけて皆痩せこけた落葉木の林を一日苛め通した。木の枝は時々ひうひうと非痛の響を立てゝ泣いた。短い冬の日はもう落ちかけて黄色な光を放射しつゝ目叩いた。さうして西風はどうかするとぱつたり止んで暴つたかと思ふ程靜かになつた。泥を拗切つて投げたやうな雲が不規則に林の上に凝然とひつついて居て空はまだ騒がしいことを示して居る。それで時々は思ひ出したやうに、木の枝がざわざわと鳴る。世間が俄に心淋そくなつた。

お品は復た天秤を卸した。お品は竹の短い天秤の先へ木の枝で拵へた小さな鑵の手をぶらさげてそれで手桶の柄を引つ懸けて居た。お品は百姓の隙間には村から豆腐を仕入れて出ては二三ヶ村を歩いて來るのが例である。手桶で持ち出すだけの事だから資本も要ない代りには儲も薄いのであるが、それでも百姓ばかりして居るよりも日毎に目に見えた小遣錢が取れるのでもう暫くさうして居た。手桶一提の豆腐ではいつもの處をぐるりと廻れば乾度なくなつた。還りには豆腐の壞れで幾らか白くなつた水を乘てゝ天秤は輕くなるのである。お品は何時でも日のあるうちに夜なべに繩に綯ふ藁へ水を掛けて置いたり、落葉を擂つて見たりそこらこゝらと手を動かすことを止めなかつた。天性が丈夫なのでお品は仕事を苦しいと思つたことはなかつた。

それが此日は自分でも酷く厭であつたが、冬至が來るから蒟蒻の仕入をしなくちや成らないといつて無理に出たのであつた。冬至といふと俄商人がぞくぞくと出來るので一遍歩かないと、其俄商人に先を越されて暴ふのでお品はどうしても凝然としては居られなかつた。蒟蒻は村には無いので、仕入をするのには田圃を越えたり林を通つたりして遠くへ行かねばならぬ。それでお品は其途中で商をしようと思つて此の日も豆腐を擔いで出た。生憎夜から冴え切つて居た空には烈しい西風が立つて、それに逆つて行くお品は自分で酷く足下のふらつくのを感じた。ぞくぞくと身體が冷えた。さうして豆腐を出す度に水へ手を刺込むのが、傑へるやうに身に染みた。かさかさに乾燥いた手が水へつけ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

る度に赤くなつた。皺がびりびりと痛んだ。惡意なそこゝでお品は落葉を一燻べ焚いて貰つては手を翳して漸と暖まつた。蒟蒻を仕入れて出た時はそんなこんなで暇をとつて何時になく遲かつた。お品は林を幾つも過ぎて自分の村へ急いだが、疲れもしたけれど懶いやうな心地がして幾度か路傍へ荷を卸しては休みつゝ來たのである。

お品は手桶の柄へ續たへた竹の天秤へ身を投げ懸けてどかりと腰を折つた。ぐつたり成つたお品はそれでなくても不見目な姿が更に檢束なく亂れた。西風の餘波がお品の後から吹いた。さうして西風は後で括つた穢い手拭の端を捲つて、油の切れた痩だらけの赤い髮の毛を拔きあげるやうにして其垢だらけの首筋を剝出にさせて居る。夫と共に林の雜木はまだ持前の騷ぎを止めないで、路傍の稍がずつと續つてお品の上からそれを覗かうとすると、後からも後からも林の稍が一齊に首を出す。さうして暫くしては又一齊に後へぐつと戻つて身體を横に動搖しながら笑ひ私語くやうにざわざわと鳴る。

お品は身體に變態を來したことを意識すると共に恐怖心を懷き始めた。三四日どうもなかつたのだから大丈夫だとは思つて見ても、恁う凝然として居ると遠くの方へ減入つて畢ふ樣な心持がして、不斷から幾らか道上性でもあるのだがさう思ふと耳が鳴るやうで世間が却つて靜かに成つて畢つたやうに思はれた。不圖氣が付いた時お品ははきはきとして天秤を擔いだ。林が竭きて田圃が見え出した。田圃を越せば村で、自分の家は田圃のとりつきである。青い煙がすつと靡つて居る。お品は二人の子供を思つて心が跳つた。林の外れから田圃へおりる處は僅かに五六間であるが、勾配の峻しい坂でそれが雨のある度にそこらの水を聚めて田圃へ落す口に成つて居るので自然に土が抉られて深い窪が形られて居る。お品は天秤を斜に横へ向けて、右の手を前の手桶の柄へ左の手を後の手桶の柄へ掛けて注意しつゝおりた。それでも殆んど手桶一杯に盛り相な蒟蒻の重量は少しふらつく足を危く保たしめた。やつと人の行き違ふだけの狹い田圃をお品はそろそろと選んで行く。お品は白茶けた程古く成つた股引へそれでも先の方だけ繼ぎ足した足袋を穿いて居る。大きな藁草履は固めたやうに霜解の泥がくつついて、それがぼたぼたと足の運びを更に鈍くして居る。狹く連つて居る田を竪に用水の堰がある。二三株比較的大きな榛の木の立つて屬る處に僅一枚板の橋が斜に架けてある。お品は橋の袂で一寸立ち止つた。さうして近づいた自分の家を見た。村落は臺地に在るのでお品の家の後は直に斜に田圃へずり落ち相な林である。繪や雜木の間に短

い竹が交つて居る。いゝ加減大きくなつた柿の木は皆葉が落ち盡して居るので、其小枝を透して四んだ[illegible]が見える。白い羽の鶏が五六羽、がりがりと爪で土を掻つ掃いては嘴でそこを啄いて又がりがりと土を掻つ掃いては餘念もなく夕方の飼料を求めつゝ田圃から林へ還りつゝある。お品は非常な注意を以つて斜な橋を渡つた。四足目にはもう田圃の土に立つた。其時は日は疾うに沒して見渡す限り、田から林から此間はたゞ黄褐色に光つてさうしてまだ明るかつた。お品は田圃からあがる前に天秤を卸して左へ曲つた。自分の家の林と田との間には人の足跡だけの小徑がつけてある。お品に其小徑と林との境界を劃つて居る午胡頽子の側に立つた。鶏の爪の跡が其處の新らしい土を掻き散らしてあつた。お品は土を手で裝めて草履の底でそくそくとならした。お品の姿が庭に見えた時には西風は忘れたやうに止んで居て、庭先の栗の木にぶつ懸けた大根の乾びた葉も動かなかつた。白い鶏はお品の足もとへちよろ〳〵と駆けて來て何か欲し相にけろつと見上げた。お品は平常のやうに鶏杯へ構つては居られなかつた。お品は戸口に天秤を卸して突然

「おつう」と喚んだ。

「おつかあか」と直におつぎの返辭が威勢よく聞えた。それと同時に竈の火がひらひらと赤くお品の目に映つた。朝から雨戸は開けないので内はうす闇くなつて居る。外の光を見て居たお品の目には直ぐにはおつぎの姿も見えなかつたのである。戸口からではおつぎの身體は竈の火を搖うて居た。返辭すると共に身體を振つたので其赤い火が見えたのである。

おつぎの脊に居た與吉はお品の聲を聞きつけると「まんまんま」と兩手を出して下りようとする。お品はおつぎが帶を解いてる間に壁際の麥稈俵の側へ蒟蒻の手桶を二つ並べた。與吉はお袋の懷に抱かれて殘に出もしない乳房を探つた。お品に竈の前へ腰を掛けた。白い鶏は提桶子の代りに掛けてある荒縄でぐるぐる捲にした竹の幹へ各自に爪を引つ掛けて兩方の羽を擴げて身體の平均を保ちながら慌てたやうに塒へあがつた。さうして青い燈の中に凝然として目を閉ぢて居る。

お品は家に歸つて幾らか暖まつたがそれでも一日冷えた所爲かぞくぞくするのが止まなかつた。さうして後に近所で風呂を貰つてゆつくり暖まつたら心持も癒るだらうと思つた。竈には小さな鍋が懸つて居る。汁は蓋を漏はすやうにしてぐらぐらと煮立つて居る。外もいつかとつぷり闇くなつた。おつぎは竈の下から火のついてる麁朶を一つとつ

て手ランプを點けて上り框の柱へ懸けた。お品はおつぎが單衣へ半纏を引つ掛けた儘であるのを見た。平常ならそんなことはないのだが自分が酷くぞくぞくとして心地が惡いのでつい氣になつて

「おつう、そんな姿で涼や寒かねえか」と聞いた。それから手拭の下から見えるおつぎのあどけない顏を凝然と見た。

「寒かあんめえな」おつぎは事もなげにいつた。與吉は寢の中で頻りにせがんで居る。お品は平常のやうでなく何も買つて來なかつたので、ふと困つた。

「おつう、そこらに砂糖はなかつたつけえ」お品はいつた。おつぎは默つて草履を脱棄てゝ座敷へ駈けあがつて、戸棚から小さな古い新聞紙の袋を探し出して、自分の手の平へ少し砂糖をつまみ出して

「そらそら」といひながら、手を出して待つて居る與吉へ遣つた。おつぎは砂糖の附いた自分の手を嘗めた。與吉は其砂糖をお袋の懷へこぼしながら危な相につまんではロへ入れる。砂糖が竭きた時與吉は其べとついた手をお袋の口のあたりへ出した。お品は與吉の兩手を擦つて拭つてやつた。お品は鍋の蓋をとつて龜梁の焙を覗しながら

「こりや芋か何でえ」と聞いた。

「うむ、少し芋足して暖め返したんだ」

「おまんまは冷たかねえけ」

「それから雜炊でも拵えべと思つてたのよ」

お品は熱い物なら身體が暖まるだらうと思ひながら、自分は酷く懶いので何でもおつぎにさせて居た。おつぎは粘り氣のない麥の勝つたぼろぼろな飯を鍋へ入れた。お品は龜梁を一燻べ突つこんだ。おつぎは鍋を卸して茶釜を懸けた。ぼうつと白く蒸氣の立つ鍋の中をお玉杓子で二三度攪き立てゝおつぎは又蓋をした。おつぎは戸棚から瞻を出して上り框へ置いた。柱に點けてある手ランプの光が屬かぬのでおつぎは手探りでして居る。お品は左り手に抱いた與吉のロへ箸の先で少しづつ含ませながら雜炊をたべた。お品は芋を三つ四つ箸へ立てゝ與吉へ持たせた。與吉は芋をロへ持つていつて直ぐに熱いというて泣いた。お品は與吉の頬をふうふうと吹いてそれから芋を自分のロで嚙んでやつた。お品の茶碗は怎うしてか冷たくなつた時鍋のと換へてやつた。お品は欲しくもない雜炊を三杯もたべた。幾ばか腹の中の暖かくなつたのを感じた。さうして漸く水離れのした茶釜の湯を汲んで飲んだ。おつぎは庭先の井戸端へ出て鍋へ一杯釣瓶の水をあけた。おつぎが戻つた時

「おつう、今夜でなくつてもええや」とお品はいつた。おつぎは默つて俵の側の手桶へ手を掛けて

「此れへも水入て置かなくつちやなんめえ」

「さうすればえゝが大變だらえゝぞ」

お品がいひ切らぬうちにおつぎは庭へ出た。直ぐに洗つた鍋と手桶を持つて暗い庭先からぼやんり戸口へ姿を見せた。闇へ一寸手桶を置いてお品と顔を見合せた。手桶の水は半分で兩方の蒟蒻へ水が乘つた。

お品は三人連で東隣へ風呂を貰ひに行つた。東隣といふのは大きな一構で蓊然たる森に包まれて居る。

外は闇である。隣の森の杉がぞつくりと冴えた空へ突つ込んで居る。お品の家は以前から此の森の爲めに日が餘程南へ廻つてからでなければ庭へ光の射すことはなかつた。お品の家族は何處までも日蔭者であつた。それが後に成つてから方々に陸地測量部の三角測量夢が建てられて其上に小さな旗がひらひらと閃くやうに成つてから其森が見通しに障るといふので三四本丈伐らせられた。杉の大木は西へ倒したのでづしんとそこらを恐ろしく搖がして お品の庭へ横たはつた。枝は拵けて其先が庭の土をさくつた。それでも隣では其木の始末をつける時にそこらへ散らばつた小枝や其他の屑物はお品の家へ異へたので思ひ掛けない薪が出來たのと、も一つは幾らでも東が隙いたのとで、隣では自分の腕を斬られたやうだと惜んだにも拘らずお品の家では竊に悦んだのであつた。それからといふものはどんな姿にも目が朝から射すやうになつた。それでも有難に森はあたりを蔽壓して夜になると殊に鬱然として小さなお品の家は地べたへ壓つけられたやうに見えた。

お品は闇の中へ消えた。さうして隣の戸口に現はれた。隣の雇人は夜なべの縄を綯つて居た。板の間の端へ胡坐を搔いて足で抑へた縄の端へ掌を綯ぎ足し綯ぎ足ししてちよりちよりと額の上まで揉み擧げては右の手を臀へ廻してくつと縄を後へ拡く。縄は其度に土間へ落ちる。お品は板の間に小さくなつて居た。蠟燭が竭きると傭人は各自に其縄を足から手へ引つ掛けて迅速に數を計つては土間から手繰り上げながら、縄がつた儘一房づつに括つた。やがて彼等は板の間の塵屑を土間へ掃きおろしてそれから交代に風呂へ這入つた。お品はそれを見ながら默つて待つて居た。お品は此處へ來ると怎ういふ遠慮をしなければならぬので、少しは遠くても風呂は外へ貰ひに行くのであつたが其晩は どこにも風呂が立たなかつた。お品は二三軒そつちこつちと歩いて見てから隣の門を潜つたのであつた。傭人は大釜の下にぼつぼと火を焚いてあたつて居る。風呂から出ても彼等は茹つたやうな赤い腿を出して火の側へ寄つた。

「どうだね、一燻べあたつたようがせう、今直に明くから」と傭人がいつてくれてもお品は臀から冷えるのを我慢

して凝然と辛棒して居た。懐で眠つた與吉を腦がすまいとしては足の痺れるのも幾度か身體をもぢもぢ動かした。漸く風呂の明いた時はお品は待遠であつたので前後の考もなく急いで衣物をとつた。與吉は幸ひにぐつたりと成つてお袋の懐から離れるのも知らないのでおつぎが小さな手で抱いた。お品は段々と身體が暖まるに連れて始めて蘇生つたやうに快惚とした。いつまでも沈んで居たいやうな心持がした。與吉が泣きはせぬかと心付いた時豫に洗ひもしないで出て畢つた。それでも顔がつやつやとして髪の生際が拭つても拭つても汗ばんだ。さうしてしみじみと快かつた。お品は衣物を引つ掛けると直ぐと與吉を釣懐へ入れた。お品の後へは下女が這入つたので、おつぎは其間待たねばならなかつた。おつぎが出た時はお品の身體は冷め掛けて居た。お品は自分が後ではひれぼよかつたにと後悔した。

お品が自分の股引と足袋とをおつぎに提げさせて歩つた時は月は霧に隣の森の峰郭をはつきりとさせて其森の樣間が殊に明るく光つて居た。世間がしみじみと冷えて居た。お品は薄い垢じみた蒲團へくるまると、身體が又ぞくぞくとして膝がしらが氷つたやうに成つて居たのを知つた。

二

次の朝お品はまだ戸の隙間から薄ら明りの射したばかりに眼が覺めた。枕を擡げて見たが頭の心がしくしくと痛むやうでいつになく重かつた。狭い家の内に鳴く鶏の聲がけたたましく耳の底へ響いた。おつぎはまだすやすやとして眠つて居る。戸の隙間が隙を開いたやうに明るくなつた時鶏が覆た現走つて鳴いた。お品はおつぎを今朝は緩くりさせてやらうと思つて居た。それでもおつぎは鶏が又鳴いた時むつくり起きた。いつもと違つて徐りひつそりして居るので驚いたやうにあたりを見た。さうしてお袋がまだ自分の後に蒲團へくるまつてるのを見た。

「おつう、せかねえでもいゝぞ、俺ら今朝少し工合が悪いから緩くりすつかんなよ」お品はいつた。おつぎは暫くもぢもぢしながら帶を締めて大戸を一枚がらがらと開けて、目をこすりながら庭へ出た。井戸端の桶には芋が少しばかり水に浸してあつて、其水には氷が硝子板位に閉ぢて居る。おつぎは鍋をいつも磨いて居る砥石の破片で氷を叩いて見た。おつぎは大戸を開け放して置いたので朝の寒さが侵入したのに氣がついて

「おつかあ、寒かなかつたか、俺ら知らねえで居た」いひながら大戸をがらがらと閉めた。闇くなつた家の内には竈の火のみが勢ひよく赤く立つた。おつぎは

「おゝ冷てえ」といひながら竈の口から燃れて出る焔へ手を翳して

「今朝は芋の水氷つたんだよ」とお袁の方を向いていつた。

「うむ、霜も降つたやうだな」お品は力なくいつた。戸口を後にしてお品は竈の火のぺろぺろと燃え上るのを見た。

「何處でも眞白だよ」おつぎは竹の火箸で落葉を掻き立てながらいつた。

「夜明にひどく冷々したつけかんな」お品はいつて一寸首を擡げながら

「俺ら今朝はたべたかねえかんな、汝樵あねえで出來たらたべた方がいゝぞ」お品はいつた。又氷つた飯で雜炊が煮られた。

「おつかあ、ちつとでもやられねえか」おつぎは茶碗をお袁の枕元へ出した。雜炊の焦げついたやうな臭ひがぷんと鼻を衝いた時お品は箸を執つて見ようかと思つて俯伏しになつて見たが、直に厭になつて舉つた。お品が動いたので懷の與吉は泣き出した。お品は俯伏した儘乳房を含ませた。さうして又芋の串を搾へて持たせた。

お品が表の大戸を開けさせた時は日がきらきらと東隣の森越しに庭へ射し掛けてきつかりと日蔭を限つて解け殘つた霜が白く見えて居た。庭先の栗の木の枯葉からも枝へ掛けた大根の葉からも霜が解けて雫がまだぽたり〳〵と垂れて居た。庭へ敷いてある庭蓋の藁も貝ぐつしりと濕つて居る。冬になると霜柱が立つので庭へはみんな藁屑だの籾殻だのが一杯に敷かれる。それが庭蓋である。霜柱が庭から先の桑畑にぐらりぐらりと倒れつゝある。

お品は蒲團の中でも減切暖かく成つたことを感じた。時時枕を擡げて戸口から外を見る。さうしては麥畑後の側に置いた蒟蒻の手桶をどうかすると無意識に見つめる。横に成つて居る目からは東隣の梢が妙に變つて見えるので凝然と見つめては目が疲れるやうに成るので又蒟蒻の手桶へ目を移したりした。お品はどうかして少しでも蒟蒻を減らして置きたいと思つた。お品は其内に起きられるだらうと考へつゝ時〻うとうとと成る。

「切干でも切つたもんだかな」おつぎが庭から大きな聲でいつた時お品はふと枕を擡げた。それでおつぎの聲は意味も解らずに微かに耳に入つた。

暫くたつてからお品は庭でおつぎがざあと水を汲んでは又間を隔てゝざあと水を汲んで居るのを聞いた。おつぎは大根を洗つた。おつぎは庭蓋の上に莚を敷いて暖かい日光に浴しながら切干を切りはじめた。大根を横に幾つかに切つて、更にそれを竪に酌つて短冊形に刻む。おつぎは飯臺へ浸した俎板の上へとんとんと庖丁を落しては其庖丁で白く刻まれた大根を飯臺の中へ扱き落す。お品は切干を刻む

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo